

二強^て一サガ⁹

N E W S A G A

阿部正行
Abe Masayuki

目次

本編
7

番外編
街の名は
227

マジックキング
伝説の『魔法王』が
自分の人格や知識の一部を
複写した魔剣の精神体。

シルドニア

暗殺をはじめとする闇の技術を
受け継ぐ「シノビ」一族出身の美女。

ミナギ

高い実力と
奔放すぎる性格から、
自由な振る舞いを
許されている魔族。

毒針

ウルザ

美しきエルフの精霊使い。
カイルの村を訪れ、
なほ崩し的に仲間になる。

リーゼ

おさななじみ
カイルの幼馴染。
格闘の才能があり、
その腕前はかなりのもの。

セラン

カイルの幼馴染で、
女の子に目がない
ムードメーカー。

ユーリガ

ルイーザに忠誠を誓う魔族。
カイル達と奇妙な縁で
結ばれている。

ルイーザ

「不死」の特性を持つ魔王。
人族との融和政策を掲げている。

カイル

主人公の魔法剣士。
一度魔王を倒したが、
真紅の宝石の力で過去に
戻り、再び冒険を始める。

炎眼

魔族有数の実力を持つが、
つかみどころのない曲者。

Main Characters

主な登場人物

本編

そこは、旅で見慣れたいつもの森とは違っていた。

視界の大半が緑で覆われているのは変わらないが、植生が違うように感じられる。木々だけでなく草の一本一本に至るまでが強靱で、踏みつけた雑草の押し返す弾力が違う。

それもそのはず、ここは人族の地ではなく魔族が住まう地、魔族領の森なのだ。

間もなく日が暮れようとするそんな森で、野営の準備をしている五人。その中には、本来この地にはいないはずの人族がいた。

「やっぱりどこか違うね、魔族領の森って」

手慣れた手つきで食事の準備をしながら、呟くようにそう言ったのはリーゼだ。並々ならぬ武術の腕前を持つ彼女とはいえ、魔族領に入ってから緊張のためか言葉少なだったのだが、数日が経ち流石に慣れたのか表情にも多少余裕が出てきている。

「精霊が力強い。強いて言うなら、巨大な魔法樹が生え、ドラゴン達が住む世界樹まであったエッ

ドス国に似ている」

リーゼを手伝いながらそんな感想を漏らすウルザ。エルフの精霊使いである彼女は、ここと人族の森との違いを肌で感じていた。

「しかし、以前魔族領に来たときも感じたが、全体的に精霊が不安定だな。聞いた話だと、砂漠と氷山が隣り合って存在している地域もあるらしい」

「そういうものなんだ。どんな風なのか想像できないなあ。砂漠も氷山も行ったことないけど」

ウルザとリーゼの他愛ない雑談が続く。表面上はいつもと変わらない様子だが、これから立ち向かわなければならぬ難事を思い沈みがちな心を、奮い立たせているかのようでもあった。

「俺としては、今回ばかりはお前達には来るのを遠慮してほしかったんだが……」

荷物を枕にして寝ころびながら女性陣の会話を聞いていたセランが、そう呟く。一見だらしなく見えるが、その顔には軽薄ともとれるいつもの飄々とした雰囲気はなく、声もどこか重々しい。

現に、彼の視線は時折鋭く動き、周囲への警戒を最大限にしている。

「そ、そんなこと言っちゃって、待ってるだけなんてできるわけじゃないじゃない」

そんなセランに対して、リーゼが少し戸惑いつつ反論し、ウルザも同意して頷く。

無論セランも、リーゼ達が足手まといになるような弱い存在だとは思っていない。自分の身を自分で守れるどころか、大いに戦力となるだけの實力を持っていることをよく知っている。

それでも、今回は同行させたくなかった、なにせ目的が目的だからだ。

「すまない……お前達が頼りだ」

ここまでの道案内をしてきた女魔族のユーリガが、申し訳なさそうな、それでいて悲痛さを滲ませた声を出し、俯いてしまう。

負傷したユーリガが、セラン達の故郷であるリマーゼ村にまで助けを求めてきたのは、四日前のことだ。

その傷はかなり深いもので、人族よりはるかに強靱な魔族でなければ、命にかかわりかねないものだった。彼女の身体のうちここに、未だ癒えない傷が僅かながら残っているのが痛々しい。

回復の魔法薬を使って既に治療したものの、どうも魔族には効果が薄いらしい。まだ完全には治療しておらず、本来なら安静にしていなければならないところだが、無理を押してでも行軍せざるを得ない理由があった。

「ユーリガのせいじゃないわよ」

あまりの気落ちっぷりに、リーゼの方が慌ててしまう。

「……魔族の街に入るのは明日なのだろう？ 考えをまとめたいので、悪いがもう一度説明してくれ、何があったのかを」

おさらいの意味を籠めて、とウルザが促すと、ユーリガは強張らせた顔を上げて頷く。

「囚われの魔王の救出か……ふつう逆だよなあ」

ユーリガの説明を聞きながらセランがぼやく。

そう、今回の魔族領侵入の目的は魔王——正確には元魔王になりつつあるルイーザの救出だった。

今からひと月ほど前、魔族領の中でも西の辺境に位置する、人族領から最も遠いと言える場所で、自らを魔王と名乗る魔族が現れた。

その報告を配下から聞いたルイーザは当初、特に気にかけることはなかった。

これ自体については、後に起きた事態を踏まえても、判断ミスというわけではない。完全な実力主義である魔族にとって、魔王を目指すのは自然なことであり、非難されることでもない。こうした下剋上は、よくあるとまでは言わずとも、ある意味当たり前であった。

そして、実力が伴わなければ排除されるだけだし、ただ名乗っただけで認められるはずもない。ルイーザのように、先代魔王であった父の死により継承する場合もあるが、世襲制というわけではなく、単に魔王が死んだ際に一番力を持っていたのがたまたま娘だったというだけだ。

魔王として認められるのに最も解りやすい方法は、当代の魔王を打ち倒すことである。しかし、遠方の地に自称魔王が現れたところで、そこから動かずにいるなら、ルイーザは何ら痛痒を感じない。事情が変わってきたのは、その自称魔王が現地を支配する魔族を倒した時点だった。

魔族の支配体制は魔王が絶対の頂点とはいえ、全てを直接支配するわけではなく、各地を実力を持った魔族が領地として治めている。代々の魔王によって程度は異なるが、ルイーザの場合は直轄の地以外は基本方針を決めるだけだった。

その領地を治める有力魔族が、目障りな自称魔王を討ち取ろうとした結果、逆に返り討ちにあっただけらしい。

このまま放置すれば自分の支配体制に傷がつき、魔王としての面子が立たなくなると、ルイーザは配下の魔族を派遣してこれを討伐しようとした。

しかしその配下も、戻ってくることはなかった。

ここでルイーザは迷うこととなった。次にどう動くべきかを。

もはや放置できる存在ではなくなった自称魔王だが、送り込んだ魔族は配下の中でもそれなりに実力のある者だったので、それが返り討ちにあつたとなると生半可な対応では不十分。

また相変わらず西の果てから動こうとしないため、ルイーザがいつそ自ら討伐に向かおうとするのを、ユリガをはじめとする側近達が止めた。

元々ルイーザが推し進めていた人族との融和は、魔族内部からの反発も多く、特に人族との戦争を望む好戦派の者達からは敵視に近い感情を持たれている。

魔王自らが軽々に動いては、そんな連中に格好の攻撃材料を与えることになる懸念したユリ

ガ達は、渋るルイーザを説き伏せたのだ。

「今にして思えば、そんな些細なことに囚われていたのは我ながら愚かといえない。何故奴らがあの様なことをしたのか、今になってみれば明白だ……」

説明の最中、己の過ちを悔やんで苦悩するユリガ。

ユリガ達は、自称魔王の根城とされる廃城に突入したが、そこはもぬけの殻だった。

このときになってユリガは気付く。これが、ルイーザのもとから腕の立つ部下達を剥ぎ取るためだったということに。



そのときルイーザが滞在していたのは、代々の魔王が居城としてきた魔族領の中心部にある魔王城ではなく、人族領にほど近い、かつてカイルやセラ達を招いた湖上の島にある城だった。最近はこちらで過ごすことが多い。

主だった側近がない状況で、不穏な気配を感じたルイーザは、すぐさま非戦闘員である使用人達を避難させた。命を狙われるのは慣れたものだが、どうにもいつもと違う、と直感したため。報告のあった時間や移動距離からして通常ならありえないが、この異状には西の地に現れた自称

魔王が関わっている、ともすぐ解った。

人気のなくなつた謁見の間で玉座に座りつつ一人待つルイーザの前に現れたのは、数に任せて攻め込むでもなく、たった一人だ。

かつて一度だけ見かけたことのある、表情すら窺えない闇を纏うかのようなロブ姿で、その背に黒翼を持った魔族。

「よく来たな、招かれざる客よ……このような真似をせずとも、余はいつでも相手をしてやるというのに」

回りくどく自分を独りにさせた手法に対し、ルイーザが皮肉を言う。

「名乗るぐらいはしたらどうだ？」

そんな問いかけにも、黒翼の魔族は答えない。

無礼無粋と思わないでもなかったが、これから殺し合いをするというのにその感想もおかしいなと、ルイーザは首を横に振る。

「まあ良い、さつさと終わらせようではないか」

ルイーザは玉座から立ち上がり錫杖を手に取ると、魔王として悠然と対峙する。その姿は自然体で、緊張もなければ警戒している様子もない。

これは決して慢心や侮りではなかった。純粋に身体能力が非常に高く、何よりも不死という特性

を持つているルイーザに勝てる魔族などいないからだ。

魔族最強と言われた三腕も、強さで言えば彼女を上回るが、その特性の前に勝つことはできなかった。だからこそこの三百年間、ルイーザは魔王で居続けられたのだ。

ルイーザの眼から見ても確かに異様な存在と言える黒翼の魔族であったが、それでも負けるつもりはなかった。

そして魔王の座を賭けた戦いが始まろうとした——のだが、そこに乱入者が現れる。



ここまで黙って話を聞いていた五人目——正確には人ではない——が、深刻そうな声を出す。

「そのことについて重ねて問うが、本当なんだろうな？ その黒翼の魔族に……ドラゴンが加勢したというのは」

信じたくない、という悲痛な思いを籠めて、何度目かになるか解らない同じ問いをしたのは、人型に変化しているドラゴンのイルメラだ。

「間違いない。巨大な、そして凄まじいまでの強さを持ったドラゴンが、城を破壊しつつその戦いに乱入し、黒翼の魔族に味方したそうだ」

ユーリガもまた、同じ答えを繰り返した。

「何ということだ……」

イルメラは頭を抱えて絶望的な声を出す。苦悩する彼女をよそに、ユーリガは話を続ける。

ルイーザは黒翼の魔族、ドラゴンと実質一対二という形になったらしく、そこから先の戦い自体がどうなったかは解らない。何せ直接の目撃者がいないのだから。

避難した非戦闘員である使用人達のはるか遠くから目撃しただけで、戦っていると思しき場所であるで火山の噴火のような火柱が見えたり、地震と間違うほどの地鳴りが響いたりしたという。

そんな天変地異を思わせる戦いは、丸一昼夜続いた後に終息した。

城は完全に崩壊し、湖上とはいえそれなりの大きさであった島そのものがほとんど消えてなくなった。

罠に嵌められたと気付き、昼夜を舍かず駆けつけたユーリガが見たものは――変わり果てた地形と、ぐったりとして意識のないルイーザを抱えた黒翼の魔族がドラゴンの背に乗って飛び去ろうとする光景だった。

それを見た瞬間激怒したユーリガは当然追いがろうとしたのだが、まるでうるさい虫でも追い払うかのようなドラゴンの尾のひと薙ぎで半死半生にされた。

ドラゴンは悠々と飛び立ち、そのままいずこへか消えていった。

こうして魔王ルイーザは敗れ、その報はすぐに魔族領全体に広まったという。

「私は……見ていることしかできなかった……まんまと策略に乗ってしまったのだ。本当ならばルイーザ様が敗れるはずなどないのに！」

ユーリガは敵の思惑通りにルイーザのもとを離れたことを激しく後悔していた。

それほどの戦いでは傍にいたところで何ができたというわけでもないだろうに、当時を思い出して歯ぎしりをするユーリガ。この苛立ちは、敵に対してと同時に、不甲斐ない自分に向けられたものでもあった。

（少しは調子を取り戻したか……）

そんなユーリガを見て、ウルザは逆にほっとする。

先ほどまでのユーリガは自責に囚われており、放っておけば精神状態が果てしなく落ち込んでいっただろう。

何かさせておいた方がいいにせよ、他のことを考える余裕はないだろうから、あえて当時の状況を話させて傷に塩を塗り、感情を昂らせたのだ。荒唐治ではあるが、ウルザなりの気遣いだった。

「しかしドラゴンか……カイルの話じゃ魔族の総攻撃、『大侵攻』だとドラゴンは魔族の味方を

していたらしいから、その関係か？」

苦惱するイルメラを横目に、セランは声をひそめてウルザに話しかける。カイルが未来の知識を持っていることは、できる限り秘密なのだ。

「解らん。竜王はドラゴンが魔族に味方することはないと断言していたが……」

かつて世界樹において対面したゼウルの言葉を思い出すウルザ。その言葉に嘘はないように思われた。

セランはちらりとイルメラを見るが、その表情もまた偽りはなさそうで、今回の出来事に関わっている可能性は限りなく低いと判断する。

「ゼウルスが関係ないのならば、それ以外のドラゴンということになるな……何か特徴とかはなかったか？」

「言い方は悪いが、率直に言わせてもらうなら、同じドラゴンでもイルメラとは比べ物にならない。あれほどの圧倒的な強さと存在感を持つドラゴン……匹敵するのは竜王しか知らない」

とはいえ、ユーリガはルイーザの使いとして世界樹に住むドラゴンを訪ね、ゼウルスとも面識があり、その竜と見間違えるはずはない。

「……聞く限りでは間違いなくジュバース様だ」

イルメラの表情が更に陰る。半信半疑、というよりも信じたくないという感じだ。

ジュバースは、全てのドラゴンの祖である神竜ヴァルゼードが健在だった神話の時代から生きている、竜王ゼウルスと並ぶ最古のドラゴンである。イルメラにとってはゼウルスと同じく、敬意どころか崇拜の対象でもある偉大な存在だ。

だからこの話を初めて聞いたとき、イルメラは自分の耳を、次いでユーリガの正気を疑った。信じる信じない以前に、ありえないことだからだ。しかしユーリガの様子を見れば、少なくとも嘘は言っていないのが解ってしまう。

本来ならば、ドラゴンは魔族だろうと人族だろうと一定の距離を置き、深く関わることはない。にもかかわらずジュバースが魔族に、しかも黒翼の新魔王に力を貸しているというのならば、それが真実かどうか確かめなければならない。

だからこそ、イルメラは共に話を聞いたグルードをゼウルスへの連絡に送った後、こうして自らセラン達に同行しているのだ。

「だが何故？ ……お一人で魔族領の氷山にいたはずなのに……一体何があったというのだ」

イルメラの苦悩は続き、ユーリガの敵と己への憤激も収まらないため、一種異様な雰囲気か辺りを包む。

「……で、そんな危機的状況だから俺らに助けを求めに来たってわけだよな」

だがセランは場の空気を読むこともなく、齒に衣着せぬ物言いをする。それが事実故に、ユーリ

ガは頷く。

「そうだ……何よりも大事な点として、ルイーザ様は今も生きておられる」

ユーリガは確かに見たのだ、連れ去られていくルイーザが僅かに呼吸をしていたのを。

敵が何を企んでいるかは解らないが、ルイーザが生きているのは間違いない。

「でも、戦いに負けたつてことは魔王の座は既に黒翼の魔族に移ってるんだろ？　今更何をしよう

がそれは覆らないんじゃないか？」

勝負ありだろ、とセランは疑問に思っていたことを口にする。

既に魔王の座が黒翼に移っているのなら、自分達にできることはないのでは、と言っているのだ。しかしこれに、ユーリガは首を横に振る。

「……いや、事態はそう簡単ではなく、これがこちらにとつて有利な点だ」

気を取り直したユーリガが、魔族の込み入った状況を説明する。

確かに直接戦つて敗れた場合、魔王の座は移ることになる。が、今回は事情が違う。

魔王の継承に明確なルールは存在しないが、それでも慣例や不文律が存在し、ただ倒せばいいというものではない。不意打ちなど卑劣な手を使えば、たとえ勝利したとしても求心力は低下する。

今回でいえば黒翼側が複数で戦つたという点が議論を呼び、ましてやその片割れが魔族ではなくドラゴンだというのがより事態を複雑にした。

勿論、実際にルイーザを倒して捕縛しているの、自らこそが新魔王と強弁することはできるにせよ、やはり反発する者は多く、魔族全体がかなり混乱しているのが現状らしい。

とはいえユーリガを含めたルイーザの側近達にとれる選択肢はほとんどなかった。

本来なら魔族として新しい魔王に従うべきなのかもしれないが、ルイーザに忠誠を誓う者はそれを良しとはしない。かといって、黒翼の魔族の実力やジュバースの存在を考えると、助け出せる可能性は皆無だろう。

側近以外でも新魔王誕生に不満を持つ魔族は多数いるが、彼らが積極的にルイーザを助けようとするかという、あまり期待できない。

ならば魔族以外に助けを求めるしかなく、それに思い当たるあてがユーリガにはあった。

これまで幾度となく傍で戦いを見てきた人間達だ。まずその実力は申し分ない。何度も共闘した結果、歪ながらも信頼関係を築けていたとも思われる。

魔族として人族に助けを求めるということには、やはり抵抗はある。しかしそうしたプライドより、ルイーザへの忠誠心が勝った。

人族領に何度も潜入して慣れているユーリガだが、カイル達はあちこちを移動しており、協力関係にあるマルニコ商会の力を借りても探し出すには時間がかかる。

それでも、ルイーザ救出を逸る他の仲間を強引に説得。以前のリーゼとの会話で出てきた、彼女

らの故郷が魔族領に接しているという情報に一縷の望みをかけて、碌に治療もせず単身リマーゼへと向かったのだった。

そして、その賭けに何とか勝った。カイルやミナギがいなかったのは残念だったにせよ、こうしてセラン達に会えたのは本当に運が良かったとしか言いようがない。

「ルイーザ様をお助けし、卑劣な手を使った奴らを改めて倒せば、必ずや魔王の座に戻れる……そのために力を貸してほしい！ 私にできることなら何でもする！」

こう訴えるユーリガに、リーゼは迷わず助けに行こうと言い、ウルザもすぐに同意した。

だが、当初意外にも慎重な姿勢を見せたのはセランだった。

「完全に想定違いだなあ……まったく肝心なときにカイルの奴はいねえしよ」

そう愚痴るセランだったが、無論本当は誰が悪いというものでもなく、間が悪かったとしか言いようがない。

当時、カイルとミナギ、シルドニアは人族領中央部にいて、各国の王や代表者が参加した世界会議の後始末を行っていた。

そこからだと、魔族領に接している西の辺境のリマーゼに行くだけでかなりの時間がかかる。

一応、遠距離でも連絡が取れる魔道具があるため、状況はカイル達にも知らせるのだが、一日に数回、それも二言三言しか会話できないため、綿密な打ち合わせまではできていない。

現在、カイルも急いでこちらに向かっているものの、何よりの問題は移動手段がないことだ。

飛行能力を持つドラゴンもいなければ、通常の数倍の速さで移動できる【ウィンド・ウォーカー】を使えるウルザもない。イルメラに迎えに行ってもらうという手も、見るからに思いつめている今の彼女に頼むのは危険に思われた。

カイルの到着を待つという選択肢もあるにはあったが、今回に限りそれは悪手だった。

時間が経てば経つほど混乱が落ち着き、そうなるに既成事実として黒翼の魔族が新魔王であると認められてしまう。

救出するのならばできる限り早くそうする必要があり、またユーリガもカイルの到着を気長に待てそうになかった。

（これまでほとんど一緒に行動していたというのに、偶に二手に分かれた途端にこれだ。完全に裏目に出たなあ）

勿論、カイルはルイーザが倒され魔王が代替わりするという未来から来たので、今の事態を予想していなかったわけではなく、むしろ必ず起こることとして何とかしなければと考えてはいた。

だが、とれる対策は少なかった。

あくまで魔族側で起こることであり、自分達が魔族領で何かするにも限度があるからだ。

それにいくらルイーザと良い関係^{ゆうぎ}を築けているとはいえ、あくまで個人的な友誼にとどまってお

り、実際にできたのは彼女に警戒するよう忠告することぐらい。

そして、それがいつになるか解らなかったのが最も痛かった。

カイルの未来知識でも魔族側で起こることまでは把握しておらず、魔族の総攻撃『大侵攻』が起った時期から逆算して推測するしかなかった。

要するに、少なくともまだ一年は先の話と考えていて、完全に予想が外れた形だ。

それから何よりも問題なのが――

（相手がちつとばかり悪いんだよね……）

古竜であるジュバースもそうだが、諸悪の根源である黒翼の魔族は未知数の存在。以前セランもちらりと見た際に、戦いたくない、と思わせられる何かがあった。

一方で、通常なら一番問題になるはずのルイーザの命に関しては、それほど心配していない。何せ彼女の特性は不死なのだから。

実際は『死にくくなっている』だけで、身体を切り刻んですり潰すことを一年くらい続ければ死ぬかもしれない、と当人は言っていたが。

ともかく、そんなルイーザだ、どんな状況であれ生きているのは間違いない。

ユーリガはたとえ一人でも救出に向かうだろう。そうした場合、二度と彼女と会えなくなるのは明白だ。

貴重な友好的関係にある魔族を失うわけにはいかない。

となれば、カイル達の選択は決まったようなものだった。

「やるしかねえか」

囚われの身となっているルイーザの現在を想像してしまい――セランは大きくため息をつく。

日もすっかり落ちた森の中、火に照らされたセランの顔にはどこか陰りがあったが、同時に何か決意を固めた顔にも見えた。

2

「間もなく見えるはずだ」

翌日の昼頃、ユーリガの案内でたどり着いたのは、セラン達にとって初めて見る魔族の街だった。

「なんていうか……普通よね」

「そうだな……普通だ」

街の中に入ったリーゼとウルザがそんな感想を漏らす。

魔族の街――そう聞くと、おどろおどろしいものを想像してしまうかもしれない。

だが多くの魔族に会い、魔族も人族もその本質は大きく変わらないということをよく解っているセラン達は、それほど衝撃は受けなかった。

建物は石造りで、通りは踏み固められた水はけのよい土。数は少ないが通りに面した商店なども見受けられ、その店先に並んでいるのはごく普通の雑貨や食料品だ。

よく見ればやはり所々に人族の街との差異があるが、それでも決定的な断絶は感じられなかった。「数は少ないながら人族も住んでいるので、お前達には特に馴染みやすいかもしれないな」

「確かにどこからどう見ても普通の街だな……人通りが少ないか」

セランがユーリガに言った通り、この街の中心だろう大通りであるのにもかかわらず、魔族や人族と思しき人影が遠目にぼつりぼつりと見える程度だ。

「……屋内には人の気配を感じるな。まるで息を潜めているようだ」

イルメラがドラゴン特有の鋭い感覚を活かし、辺りを見回している。

「普段はもう少し多い。今は時期が時期だけにな……」

ユーリガの声は沈んでいる。

「ここはルイーザ様が直接統治されている街で、この街の住人はルイーザ様から恩恵を受けた者が多い。だからこそ憂えているんだ」

ルイーザが人族との融和を目指して、娯楽、つまり文化を輸入していたことを思い出すセラン。

確かに、店先には人族領で見かける遊戯盤や本などが置いてあった。

そして今この街全体を包む悲しみを見れば、それが少なくない成果を生んでいたことがよく解る。

「なるほどね……そういえば、ここはなんて名前の街なんだ？」

「名前……？」

セランの問いに不思議そうな顔になるユーリガ。どうやら街に名前を付けるという習慣自体がないようだ。

「もし人族の街に魔族がいたら大騒ぎどころの話ではない、そういう意味では魔族の方が寛容なかもしれないな」

ウルザはそんな感想を漏らす。

「名前を決めてすらいらないところを見ると、単に細かいことを気にしないだけだと思うが……それよりこの後はどこに行くんだ？」

それなりに興味深く街を見回していたセランだが、それにも飽きたのかユーリガを促す。

「解った……こっちだ」

ユーリガは、街の中心部にある大きめの建物へと入っていった。

中に入っすぐのところにかんりの大部屋があり、十人ほどの魔族がいた。

魔族は個体差が大きく、解りやすい平均がとれないが、基本的には人間よりも長寿だ。なので外

見からその年齢を判断するのは難しいものの、若い魔族が多いように思われた。

ただ、全員殺気立っているというか、明らかに余裕がないように見受けられる。

というのも、ここにいるのは、黒翼の魔族との戦いに敗れてもはや魔王とは言えなくなったルイーザに今でも忠誠を誓う側近達だった。

「ようやく戻ったか……こんなときによく勝手な行動をとれたな！」

「クリート、ルイーザ様の居場所解ったのか？」

そのうちの一人が苛つきを隠しめせずに言うも、ユーリガはそれを意に介さず、最も知りたい情報を端的に訊く。

「それが……ひと足遅かった。奴ら、城の中に入ったそう。ルイーザ様も共に……」

一瞬言いよんだものの、クリートと呼ばれた魔族は悲痛な声で答えた。

ここで言う『城』とは、魔族の首都ともいべき場所にあり、歴代の魔王が居城とし、人族からは魔王城と呼ばれている城である。

そこに入ったということは、黒翼の魔族が魔王として認められたということだ。

「無論、入城の際にはひと悶着あつたそうだが、思いの外支持する連中が多いようだ。特に好戦派の連中は真っ先に認めたようだ……あのような卑劣な手を使った奴を魔王として仰ぐなど！」

クリートが歯ぎしりをしながら吐き捨てるように言う。

「雷息^{らいそく}が死んで大人しくなったと思っていたんだが」

ユーリガも舌打ちをする。人族をひたすら憎み、好戦派の急先鋒とも言うべき存在であつた雷息は、今から一年近く前に死んでいる。

他にも要因はあつて、それ以来好戦派の勢いは下火になっていたのだが、これ幸いにと黒翼のもたらした流れに飛びついたようだ。

「……ならば城に乗り込んで、ルイーザ様をお助けせねば」

当然のことのように言うユーリガに対し、今度はクリート以外の魔族からも不満の声が上がる。

「おい！ 散々遅れておいて何を仕切ってるんだ！」

「魔王様に目をかけられているからといって、勝手が過ぎるぞ！」

「しかも遅れた理由が……人族に助けを求めるためだ?! ふざけるな！」

口々に文句が叫ばれ、一気に非難が集中した。

恐らくは、このどうしようもない現状に対しての怒りを八つ当たり気味にぶつけているのだろうが、このままでは自分達にも飛び火するかもと、リーゼ達が身構える。

「解っているはずだ、我々だけでルイーザ様をお助けすることはできないと！」

だが至極冷静なユーリガの指摘に、魔族達は言葉に詰まる。口こそ出さないが、自覚はあるのだろう。

「た、たとえ敵^{かな}わずとも、せめて奴らに一矢報いることができるなら……」

「それはただの自己満足だ！ そんなものの何の意味もない！」

クリートの反論を、ユーリガはばつさりと切り捨てる。

「お、お前には！ お前には魔族としてのプライドがないのか!？」

「私のプライドなどルイーザ様の御身^{おんみ}に比べれば取るに足らない！ もしこれが後に問題になるというのであれば、ルイーザ様の名を汚すというのであれば、お助けした後で全ての責を取り、私は自決するまでだ！」

一切の迷いのないユーリガの覚悟に、これまでさんざん非難していたクリート達も思わずたじろいでしまう。

「ルイーザ様をお助けするためなんでも、どんなことでもする」

その迫力に気圧されたのか、クリート達はそれ以上反論することができなかった。

「……いいだろう、そこまで言うのならこれ以上は何も言わない。だが確認しなければならない点がある」

クリートはセラン達を値踏みするような視線を投げる。

それはある意味で当然の疑問——そうまでしてユーリガが呼んだこの人族達は、本当にルイーザを助けるのに役立つのかどうか。

「残念ながら予定していた全員ではないが、その実力は私が保証する。特にこの二人の実力は身をもって知っている」

ユーリガはリーゼとウルザの二人を見る。その眼には複雑な感情が見て取れた。

「潜入中に人族に敗れたと聞いてはいたが……そいつらか」

じろじろと値踏みしてくる視線に、リーゼとウルザは居心地が悪くなる。

「おいおい、女を無遠慮に見るもんじゃねえぜ、そんなんじやモテねえぞ」

そこへ、セランが視線を遮^{さへ}るように割って入る。もっとも、庇^{かば}われた二人はお前がそれを言うか、と言いたげな顔でセランを見ているが。

「確かクリートだったな？」

「……なんだ人間」

名を大事にする魔族としては、人族に名を呼ばれたことを不快そうにするが、今はそれどころではないと解^と解^とっているのとどろあえず文句は言わない。

「さっきからよく喋^{しゃべ}るな。こっちは弱い奴ほどよく吠^ほえるって言葉があるんだが、魔族にはねえのか?」

「ほう、言うではないか……この状況でそれだけほざけるとは、度胸はあるようだな」

「度胸だけじゃねえよ。こっちの実力が知りたいのならもっと簡単な方法があるぜ……って痛^{いた}てて

て」

腰の剣の柄を軽く叩いて挑発したセランを、リーゼが後ろから耳をひっぱって止める。

「ちよっと！ なに喧嘩売ってんのよ！」

「け、喧嘩売ってるのは向こうだろが。それにこうする方が手っ取り早い！」

実力が不安だと言うのなら、身をもって解らせる。乱暴ではあるが、確かに手段の一つではある。しかし、これから共にルイーザを助けようというのに互いに争うのは、危険も大きい。

「もし怪我させたらどうするのよ！ もうちよっと考えなさいよ」

リーゼのそれは相手を氣遣った善意の言葉ではあったが、かといってその真意が伝わるとは限らないし、それどころか逆効果の場合もある。

今回がまさにそうで、クリートは極自然に格下扱いされて労わられたのだ。侮辱と取られても仕方ない。

「お前こそ考えて喋れよ」

「うう……」

険悪な雰囲気が始めたせいで反論できないでいたリーゼだが、そんな中、場違いな声がかかる。

「やめておきなさい、残念だけどその人間の言う通りよ」

それは、セラン達にも聞き覚えのある声だった。

3

声のした方を見ると、一人の女魔族が建物の奥から歩いてくる。

特徴的な燃えるように赤い眼に、羊に似た角。□元にはからかうかのような笑みを浮かべており、

どこか獲物を狙う蛇を連想させた。

「お前は確か……炎眼えんがんだったな」

「あら、覚えててくれたのね。嬉しいわ」

以前セラン達と出会ったこの女魔族は、何らかの功績を挙げるか特に実力を認められた者にしか与えられない個の尊称というものを持ち、魔族全体でも十人といない実力者の一人である。また、かつてはルイーザに反発していたことでも知られている。

「なんでここにいます？」

セランが自然な動きで位置取りをする。ひと呼吸で炎眼に斬りかかれる距離に、だ。

直接戦ったことのあるリーゼとウルザも、迷わず戦闘態勢をとってしまう。

「ああ、そんなに警戒しなくていいわよ。今更あなた達とどうこうなんてつもりはないから」

セラン達の意図を汲み取ったのか、手を上げて無害ぶりをアピールする炎眼。

「とりあえず久しぶりね、確かりーゼにウルザ……よね？」

少し自信なさげで確認するかのようであるが、炎眼は二人の名前を呼んだ。

「……意外だな、お前みたいな奴が人族の名を覚えてるなんて」

それにユーリガが驚きを示す。実際、これまで炎眼は人族など塵芥ちりあくたのように扱っていたのだ。

「私だって流石に、自分を倒した連中の名前くらい覚えるわよ」

自分を倒した——炎眼のその言葉に衝撃を受けたのはクリート達だった。

「た、倒した、ですか？」

「そういうことよ。元気だけはいいその女ならともかく、私を倒したとあれば、彼らの腕を信用してもいいんじゃない？」

この物言いには文句を言いたくなるユーリガだったが、この場においてはある意味助け舟なので口をつぐむ。

「そしてそっちの人間の男……セランに関しては、私が言うまでもないんじゃない？」

それはどういう意味だ、と問いただしたかったセランだが、彼の名前が出た途端に周りの空気が一気に変わっていた。

先ほどまでの險悪さは払拭され、今度は驚愕きようがくや緊張、戸惑いに衝撃といった別の意味での不穏さ

が漂い始める。一体何事かとセランがクリート達に視線を向けると、無意識のようであるが半歩後ずさって距離を取られてしまう。

「炎眼……様、それでは噂は本当なのですか？」

クリートが恐る恐るといった感じで確認を取る。

「ええ、そうよ。その男がセラン……三腕に勝った人間よ」

炎眼がはつきり断言すると、おお、と低い唸り声うなりが上がった。

三百年前の人族との大戦で活躍し、純粋な強さではルイーザをも上回る魔族最強の英雄と畏れられた三腕。それが今から約一年前に人間に倒されたという話は、魔族全体に小さくない衝撃を走らせたものだ。

「その件か……」

セランは苦い顔になる。彼にとってはあまり自慢できることでもないのだ。

正確にはカイルと二人がかりでのことだったし、とどめはリーゼが力を貸した上、更にシルドニアがいれば自分も協力したと主張するだろう。

ルイーザからも姑息卑怯こそくと言われるくらい策を弄した末に何とか勝っただけで、とてもではないが納得のいった戦いではない。

「当然でしょ、人族のあなたが思ってるより三腕の名前って大きいのよ。それに勝ったあなたは、

魔族の間じゃ有名なのよ……安心なさいな、決して悪い方向でじゃないから」

確かにセランを見る魔族の顔には恨みやそういったものは感じられず、それでいて認めたくはないという複雑な感情が入り混じっている。

「確かにこんな反応は予想外だな」

セランとしては英雄を倒したのだから恨まれても仕方ないとは思っていたものの、強さを尊ぶ傾向が強い魔族からは敬意に近いものを持たれている現状は不思議と言えた。

「あの方は我々にとって、魔族にとって特別であつたからな……それを倒したのだ、相手も人族の英雄でなければならぬ」

そう言ったユーリガはどこか遠い眼をしていた。

「しかし容貌が聞いていたのと違うぞ。人族にしては眉目秀麗で女子と見間違ふかのようだ……」

「俺はひと目見たら子供が三日三晩泣き叫ぶような凶悪な顔だと……」

「いや、常に血走らせた眼で獲物を探し続け、その身体が返り血で赤く染まらぬときはないとか……」

「おい、色々不穏なのが混じってるぞ」

聞かえてくるひそひそ話には、セランとしても聞き流せないものがいくつもあった。

「仕方がないんだ。ルイーザ様はかなり力を入れてお前のことを触れ回っていて、それが魔族全体に広まったのはいいが、興味本位の噂が独り歩きしているようで……」

それらを止められなかったユーリガが、そつと眼を逸らしながら言う。

どちらかというと好意的に捉えられている様子とはいえ、少々暴走気味なのは否めなかった。

「ま、まあいい……それより確認しておきたいんだが、何でお前がここにいる？」

炎眼はルイーザと対立していた。それ故にセラン達とも戦いになったのだ。

「あら、ご挨拶ね。私はルイーザ様に忠誠を誓っているのよ。それに今の居場所を知らせたのは、この私よ？」

「意外だな、お前みたいなタイプは真つ先に新魔王に尻尾を振ると思ったんだが」

忠義というものを感じられない、と遠慮容赦なしに言うセランだが、当の炎眼も悪びれずに答える。

「勿論そうしたのよ……向こうは私のことを相手にもしなかったけどね」

そのときのことを思い出したのか、炎眼は面白くなさそうに呟く。

炎眼は元は好戦派だったのに、三腕や雷息が死んでバランスが崩れそうになるとあっさり鞍替えして、ルイーザにすり寄った過去がある。

今回もそうしようとしたが、結果は芳しくなく、新魔王に会うことすらできなかったらしい。

「要するに炎眼はやりすぎた。裏切りが過ぎたのだ。今更新魔王についたところで重く用いられることはない。一か八かルイーザ様につくしかないということだ」

ユーリガが辛辣にそう言っても、炎眼は否定しなかった。

「まあそういうことよ、少なくともルイーザ様は正当な評価をしてくれるわ。正直なところ賭けだけど、そこまで分が悪いとも思っていないのよね」

その物言いにユーリガは眉をひそめるが、とりあえず有力な味方であるので黙っている。「とにかく私のことは信じられないだろうけど、それでいいのよ。利害関係の一致している協力者、そう思ってくればいいわ……それよりも、事情を抱えているのはむしろそっちじゃない？」

炎眼は、先ほどから黙って事の成り行きを見ているだけのイルメラに意味ありげな眼を向けてから、ユーリガに言う。

「あれ、確かドラゴンよね。何でいるのかしら？」

クリート達には聞こえないような小声での問い。むしろそっちが信頼できない、そう含ませていたイルメラはあくまでジュバースの真意を確かめるために同行しているので、それ以外の、魔族の内部事情に関わるつもりはない。

しかし黒翼に味方するドラゴンがいる中、もしクリート達にドラゴンであると知られれば、いらぬ誤解と混乱を招く。だから正体は隠しておこうと、ユーリガとイルメラの間で事前に取り決めていた。

だが炎眼は以前、人化したイルメラを見ているため、目ざとく見抜いたのだ。

「……いいわ、貸しにしておいてあげる」

ユーリガが返答に窮していると、炎眼はそう言って話を打ち切る。黙っていてやるから恩に着ろ、そう言いたげだった。

「聞いているか？　聞いておきたいことがある。ジュ……いや、その魔王に手を貸しているドラゴンがどこにいるかは解っているか？」

炎眼の視線に気付いたのか、それまで黙っていたイルメラがここで口を挟む。

「そうね、噂だけど、新魔王が入城する際に人族の老人が一人混じっていたそうよ。ドラゴンが人化できるなんて知ってる魔族はほとんどいないはずだから、気付かれなかったかみだけど」

「そうか……」

それきりイルメラは思いつめたように考え込んで黙ってしまふ。

「それと、ルイーザ様の救出に向かうのならできる限り急いだ方がいいわ。あの黒翼……いえ新魔王はね」

炎眼が少し顔を引き締めて言う。

「支持が充分に集まり次第、時期を見て人族に総攻撃を仕掛けると明言しているわ」

「それは……」

ウルザが絶句し、リーゼなどは蒼白（そうはく）になっている。

総攻撃。それはカイルが最も懸念していた『大侵攻』に他ならない。

実際に体験していないリーゼ達には想像しかできないが、地獄のような光景になることだけは解っている。

「で、今までのルイーザ様の方針に不満を持っている連中は新魔王を支持しているわ。ドラゴンの力を借りたということを差し引いてもね……結構多いのよねえ」

「多い？ 全員じゃないのか？」

ウルザが疑問の声を上げる。

魔族であれば人族との戦いは望むところで、最悪、魔族全体がぐさま従うのではないかとすら彼女は思っていたのだ。

長寿のエルフであるウルザは親世代が魔族と交戦しているため、魔族の脅威きょういを聞かされている。だからこそ、その反応に違和感を覚えた。

「ルイーザ様の試みは、少しずつだが確実に実を結んでいた。今はまだ一部でも、人族との融和を本気で望んでいる者もいる」

ユーリガは己の主が成してきたことを誇るかのように言う。

他にすることがない、と言わんばかりに惰性だせいで続けていたルイーザの人族との融和策は、確実に実を結んでいた。

現にここにいる魔族達は、セラン達に対して色々思うところはあるにしても明確な敵意は持って

いないようで、文句を言いつつも人族の助力を受け入れている。

名前を呼ばれることにもそれほど忌避感きひかんがないようであり、これこそが三百年に及ぶルイーザの活動の成果なのだろう。

「……やっぱり必要だな」

誰にも聞かれないような小声で呟くセラン。もしこの場にカイルがいたとしたら、同じ感想を漏らしただろう。

正直なところ、セランはルイーザの救出を難しいと考えていた。無論、できれば助けたいが、犠牲を払ってでもというほどではなかった。少なくとも、今までは。

だが、何としてでも助けなければならぬ理由が出来た。今やルイーザの存在は絶対に必要だった。「ただ魔王……いえ、ルイーザ様を殺さないのは妙なのよね。勿論あの方を殺すのは手間なんてもんじゃないけど、生かしておく理由はないはずなのに」

「……何か利用目的があるってことだろうな」

カイルから事情を聞いていたセランはその利用目的についても推察できたのだが、ここでは口にできない。

「で、実際のところどうなんだ？ この戦力で城に囚われたルイーザを助けられるのか？」

セランは誤魔化すつもりでもなく、率直に現状で一番の問題を口にする。

「それは……城にいる魔族はそう多くないし、私は城の中についても詳しい。だが……」
ユーリガは言葉^{ことば}を濁す。

戦って倒すのではなく、あくまで助け出すことが目的だ。この人数でも不可能とは言わないが、難しいといったところなのだろう。

「確かに戦力不足だ……だからといって時間もないか」

時間は完全に黒翼側の味方だ。現在は混乱と動揺があるため、明確な態度をとっている魔族は少ないが、それも次第に収まっていくだろう。

「魔族のことはよく解らないけど、日和見^{ひよりみ}している人はいるんでしょう？　その中で味方にできそうな人はいないの？」

リーゼのもっともな指摘にユーリガは考え込むが、心当たりはなさそうだった。

「そうね、一人いいのがいるわ。能力的にも今回の救出に役立ちそうな奴で、引きこもっている場所もここから城に向かう途中にあるし、好都合ね」

だが、炎眼には思い当たる人物がいるようだ。

「まさか……」

「ええ、『毒針^{どくはり}』よ」

意味ありげな笑みを浮かべる炎眼に、ユーリガが困惑している。

「それが本当ならうってつけだが、何か問題があるのか？　何者なんだ、その毒針^{どくはり}ってのは？」

ユーリガの様子からして問題がある人物かと思い、セランも何とも言えない渋い顔^{しぶ顔}になる。

「いや、その……個の尊称^{そんけい}持ちの有力者^{りきりき}なのだが、あの方は扱いが難しい。ルイーザ様も半ば放置されていた」

「逆らっていたのか？」

ユーリガは困ったような顔で首を横に振る。

「いや何と言うべきか……強いて言うならば独立独歩を行かれるお方としか……」

「単に面倒くさがりなだけよ。怠惰^{たいだ}で、ついでに飽きっぽい性格」

言葉を選んでたユーリガをよそに、炎眼はぼつさり切り捨てる。

「だがそれを許されるだけの實力を持った方だ」

フォローになるかどうかは解らないが、ユーリガは一応付け足す。

「なるほど、それだけ強いというわけか」

「強いというのは少し違うけど……ただ魔族の中で最も敵に回したくないわ」

意味ありげなことを言う炎眼を、ユーリガも無言で肯定する。

「ま、私がいれば少なくとも話は聞いてもらえるわ。あいつとは色々要因縁もあつたしね」

「解った……とりあえずこれからその毒針とやらに会いに行こう。で、協力を取り付けて城に向かい、

ルイーザを救出。細かいところはその場の状況に応じて臨機応変に対処する……これでいいか？」

大雑把で行き当たりばったりとも言える方針だが、現状ではそれ以上望めないだろうと、ユーリガや炎眼、気圧されてすっかり言葉が少なくなつたクリート達もセランの意見に納得する。

「あと一つ確認なんだが……根本的な質問だ。何でここは無事でいるんだ？」

「どういう意味だ？」

セランの質問の意味が解らないと、ユーリガは訝しげにする。

「いや、ここはルイーザが力を入れていた所なんだろう？ 相手からしてみればそんな場所を放つてくはずがない」

ルイーザの影響を色濃く残している地をそのまま残しておけば、後々反抗勢力の温床となり、支配の妨げになるのは明白だ。

もしこれが人族だったら真つ先に制圧し、場合によっては焼き払って更地にしなければならぬ場所のはず。

だがユーリガはまだ意味が解らないという顔で、それは炎眼も同じだった。

「なるほどね、考え方の違いってのは大きいなあ……まあ俺だったら餌として利用するな。残党狩りに丁度いい、集まったところをまとめて討つのに使える」

実際こういう風に集まっているのだからな、とセランは言うが、魔族達は考えもしなかったとい

う顔をしている。

人族同士ならばちょっと考えれば思いつくし、むしろあからさますぎて使えない手だ。

「正直なところ、そういったことを考える魔族は少ないと思うが」

「人族ってえげつないことを考えるのね……」

魔族に呆れられるという不本意な状況になったとき、そこでセランの顔つきが変わる。

「……いや、魔族でも思いつく奴はいるみたいだぜ」

セランは今までは打って変わって厳しい声を放ち、建物の外に出た。

4

人気のない通りを、こちらに向かって歩いてくるその魔族は目立っていた。

セランが得た第一印象は、まるで幽鬼のようだというものだった。そして目立つのは、二振りの剣を持っている点だ。

剣は人族にとって最も普及している一般的な武器だが、魔族には武器を使用する者は少なく、剣を使う者など皆無と言つていいはずだった。



「こんだけ殺氣を漲らせてるんだ、建物の中からでも解ったぜ……そこで止まれ。ただの通りすがりじゃねえだろ、用件は何だ？」

十歩以上の距離だが、ひと息で斬りかけられる位置でセランは声をかける。素直に従った相手は、こちらを探るような視線を向けてくる。

「人間、お前がセランか？」

感情の籠^{こも}っていない平坦な声なのだが、そこには理屈抜きの凄^{すご}みがある。

「だったらどうだと……」

言うんだ——セランがそう続けようとしたとき、相手が動いた。そしてそう思った次の瞬間には、目の前にいた。

まるで瞬間移動したようだが、セランにはそれが尋常^{じんじょう}でない速さ故の錯覚であるとか解った。抜き放った剣による首狙いの斬撃。捻^{ひね}りのない正面からのその攻撃を、セランはかろうじて剣で受けるしかなかった。

頭で考えるよりも先に体が勝手に動いた結果であり、受けたと言っても本当にぎりぎり、僅かながら首筋に傷がついている。

更に追撃として、相手は左手の剣の切っ先をセランの顔面に向けて刺突を放ってくる。すかさず首と上体を反らして何とか回避するが、これも鼻先を掠^{かす}める際^{きわ}どさだった。

セランとてやられっぱなしではなく、反撃を仕掛ける。バランスを崩しながらも蹴りを放ったのだ。だがやはり体勢が悪かったせいかわ避され、互いに一旦距離を取る。

背後にいたウルザなどは、この時点でようやくセランが斬りかかれたことに気付いたほどだ。まさに電光石火と言わなければならない。

「久しぶりだぜ……こうも死を間近に感じたのは」

セランは、ほんの僅かながら呼吸が乱れて冷や汗が流れているのを自覚する。数秒でこんなに精神を削られたことなど久しく記憶になかった。

二回とも身体が勝手に動いただけで、今頃死んでいてもおかしくない、まさに紙一重の展開。

「この地にいる人族の男ならば……そう思ったが、今の挨拶で死なないとは、間違いないようだな」
「なんて試し方がやる……」

人違いだったらどうするつもりだったんだと言いたかったが、それすら許されないほどのとてつもない殺気だった。

「セラン！」

「下がってろ！」

反射的に前に出ようとしたリーゼ達を、セランは短くも鋭い叱責で止める。

いつものどこか余裕のある飄々とした態度には程遠く、付き合いの長いリーゼでさえ聞いたこと

のない、切羽詰まっているようにすら感じられる声だった。

「こんなバケモンがいるとはなあ……で、お前は何者だ？ 状況からして黒翼の手下か？」

「そんなところだ……だが目的はお前だ、人間」

「俺？ 何か恨まれるようなことでもしたかあ？」

セランはいつもの軽口を叩きながらも、これ以上ないほど集中して相手の出方を探っていた。

「三腕を討った片割れ、それがお前を狙う理由だ」

「ああ……ひょっとしてお前、あのおっさんの身内か？」

三腕の名を出した瞬間、それまでと変わってこちらを見る目に籠った感情に、セランも覚えがな
いわけではない。

功名のためだとかではなく、ただの敵意でもない、何か別の負の感情の籠った眼だ。

「そういえば聞いたことがあるわね、剣を使う三腕の弟子のことを」

背後の炎眼が思い出したように言う。

「弟子？ そんなのがいたのか？」

「ええ、あいつならいずれ俺のことを殺せるかもしれない、って嬉しそうに言ってたわ」

「どこまで戦闘狂だったんだか、あのおっさん……」

自分を倒させるために弟子を育てる——あの三腕ならありえそうな話だった。

「要するに敵討ちってことか」

セランの発言に対し、二刀の魔族は薄く笑う。

「人族ならばそういうこともあるだろう。だが俺にとつて三腕はあくまで越えるべき目標であつて、いずれ倒す相手だつた……それがいなくなつてしまった今、俺の強さはお前ともう一人を殺すことでしか証明できないのでは」

「なるほどね……」

「正当な決闘だつたからな、あの女が魔王のままでは、お前と戦えなかつた。だから俺はあの方の……魔王の誘いに乗つた。こうしてお前と戦う機会を得るためにな」

人族との戦いを禁じていたルイーザが魔王のままでは、セランと戦えない。それ故、新しい魔王についたというのだ。

「俺を殺すために黒翼についたのかよ、変なところで律儀つか生真面目な奴だな……それでも三腕の影響か」

武人然としていた三腕のことを思い出す。あれの弟子なら、そういった考え方にも納得できた。

これで相手の正体が解つたのはいいが、セランとしても剣技や速さが自分より上の剣士など久しぶりだつた。

どれほど厄介な相手なのかは言うまでもない。言うまでもないのだが――

「さあて、どうするかなあ……」

セランはいつもの不敵な、そして獰猛な笑みを浮かべかけていた。

自分でも悪癖だと解っているが、こういう相手と戦い倒すことは、セランにとって楽しみなのだ。だが今回は周りが、そして状況がそれを許さなかつた。

「ルイーザ様は無事なのだろうな！」

「待て！ 聞きたいことがある、ジュバ……ドラゴンは何故魔族に味方をしている!？」

「ねえちょっと、いつ誘いに來たの？ 私には一切声がかからなかつたのだけど！」

「だからお前ら來んなつて！」

そうセランは叫ぶが、誰も引つ込む様子はない。

このままでは自分の望む勝負ができないと判断したのか、二刀の魔族は後方に下がり、充分距離を取つた後で戦闘態勢を解く。

「仕切り直しだ……次に会つたときには必ず貴様を殺す」

そう言い残すと、踵を返して走り去つた。

セランは反射的にその背を追いかけて斬りかかろうとしたが、自分より相手の方が速いのは明白だ。そして罠の可能性も捨てきれないので、結局見送るしかなかった。

「厄介な相手だ……つたく、早くカイル來ねえかな、押し付けてえぜ」

「珍しく気弱なこと言ってるわね。拾い食いでもしてお腹壊したの？」
リーゼが、らしくないことを言うセランを一応気遣ってくれる。

「ちげえよ！ ……普段だったらこんなこと言わねえよ」

「ああ……」

表情からリーゼにもセランの言いたいことが解ったようで、言葉に詰まる。

いつものセランなら強敵相手でも楽しむことができるが、今はその余裕がないのだ。

これで向こうにセラン達が来ていることがばれたし、その目的がルイーザの救出だと推測するのも容易だろう。新しい難敵も現れ、カイル達との合流にもまだ時間がかかるとなると、お世辞にも状況はいいとは言えない。

「それでも行くしかないってのはつらいところだな……厄介なことになりそうだぜ」

セランは大きくため息をついた。

5

「まだ着かないのか？」

「ええ、もう少しよ」

セランの問いに気楽そうに答えたのは、道案内を買って出ている炎眼だった。

街を発った翌日、セラン達はまた森の中にいた。目指しているのは、その先にあるという『毒針』の領地だ。

「改めて訊くが、その毒針ってのは本当に役に立つのか？」

できることならば最速で魔王城に向かい、ルイーザを救出といきたいところだが、毒針のもとに寄ることになったのは炎眼の提案だ。

「ええ、保証するわ。まあ私の保証じゃ信用できないでしょうけど、その女が大人しくついてきているのが証明になるでしょう？」

炎眼の視線の先にはユーリガがいる。

恐らくこの中で誰よりも早くルイーザを助けたいはずのユーリガが、寄り道をしてでも協力を取り付けたいというのだから、確かにそれが保証となるだろう。

「聞く限りじゃ役に立つのは間違いないだろうが……」

「ああ、あの方の能力があれば、ルイーザ様の救出の大きな手助けになるだろう……ただ……」

そう言ったユーリガは渋い顔をしている。自分の判断が本当に正しいのかどうか、自問自答しているかのように。